

## 本を紹介します

親と子と教職員の教育相談室 徳永 恭子

### 「部活があぶない」

著者 島沢 優子(フリージャーナリスト) 2017年6月 発行 講談社現代新書

著者は、筑波大学4年の時、女子バスケットボール全日本大学選手権優勝の経験を持つ。この彼女が全国の中学校、高校で部活についての生徒や先生の取材を行った。そして「部活は誰のものなのか」と言う問題提起をしている。部活で仲間を作ったことが「宝物」と返答する高校生がいる。一方部活で顧問の暴言、暴力で精神的に傷つけられ、自殺した子もいる。表面に出てこない部活での人権侵害や暴力、長時間練習などを著者は「ブラック部活」と書いている。それは、過労死寸前まで部活を担う教師にとっても「ブラック部活」である。ブラック部活は、ブラックバイト、ブラック企業とつながると警告する。

ブラックの種になるのは、体罰や暴言が指導に必要と思い込んでいる顧問、厳しい指導が成功につながると信じる保護者、部活を何らかの道具にしようとする学校で、その三者が一体になってブラック部活という巨木を支えてきたと指摘する。

勝利すること、一位になることが重視される「結果主義」、そしてわが子さえよければと考える「わが子主義」を卒業するように教育関係者に意識改革を提言する。

この本で紹介しているプロサッカーコーチの池上正さんの「子どもをぐんぐん伸ばす11の魔法」は、部活指導者だけでなく、教育全体に言い得る教訓だと思った。



## 「不登校を経験して」

東京都高等学校教職員組合 西村 由夏

私は中学校の3年間のうち、2年半以上学校に行っていませんでした。いわゆる不登校の生徒です。その後、夜間定時制高校に進学し、現在は高校の教員をしています。自分自身が不登校だったからこそ、教員として不登校の生徒に対応する時に気を付けていることがあります。それは、「これだけ対応策をとったのだから、はい、登校できるでしょ」というスタンスをとらないこと。教員の研修でも、「どのようにすれば不登校の生徒を登校させることができるか」というテーマで、皆で意見を出し合うような場面があります。私も研修に参加している立場として、いくつかのアイデアを述べたりはするのですが、心のどこかで「あの時の自分は、先生にどのように対応してもらっても学校に行けなかったらどうかな…」と思っています。そんな私の心とは無関係に研修の議論は進み「こういう対応がよい」という話になってしまいます。

私は先生が対応を考えることも重要だと思

いますが、それと同時に本人の心の成長を待つことも重要ではないかと思えます。もちろん、何もしないことが正解だと言っているわけではありません。しかし、本人の「登校しよう」という気持ちが出来上がる前から、外堀を埋めて、「さあ、登校できるはずだ」というスタンスは、良い結果を生まないことがあると思っています。当時の自分のことを思い出すと、そうやって外堀が埋められた時は、いくつも「学校に行けない理由」を考えたものでした。無理やり考えた「行けない理由」は自分でも真実かどうか分からないものもありました。

不登校経験のある一人として、言わせていただければ、「どうしても学校に行けない時期というものがある」ということを理解してほしいです。時間がたてば、登校してみようかなという心の変化もあるので、今、どうしても解決しようとせずに、ゆっくり見守るスタンスも大事ではないかと思っています。